

特集 おもしろ研究・先生 XI

アスリートたちを陰から支える
スポーツ整形外科とは?!



三重大学大学院医学系研究科・教授
加藤 公 Katou, Ko

手術室にて

これがスポーツ整形外科!

スポーツ整形外科は骨・関節・筋肉・靭帯など運動器の疾患を専門に、整形外科の診療技術を駆使してスポーツ外傷・障害の診療を行う科です。スポーツ外傷とは骨折や捻挫、脱臼などのいわゆるケガのことをいいます。また、スポーツ障害とは、同じ動作の繰り返しで一定の部位に力が集中して起こる故障・オーバーユースのことをいい、疲労骨折や野球肘、シンスプリント*などがこれにあたります。

「スポーツ」と名のつくとおりスポーツ選手との関わりが多く、私自身も女子ゴルフの宮里藍選手や野球のイチロー選手などをはじめ、これまでに多くのアスリートの診療にあたっています。また、ハンドボールを中心に、日本代表チームのドクターとして世界選手権やアジア大会などへも同行しました。

*シンスプリントは、脛骨付近に不快感や軽い鈍痛を伴う骨膜炎の炎症。陸上競技者に起こりやすい。

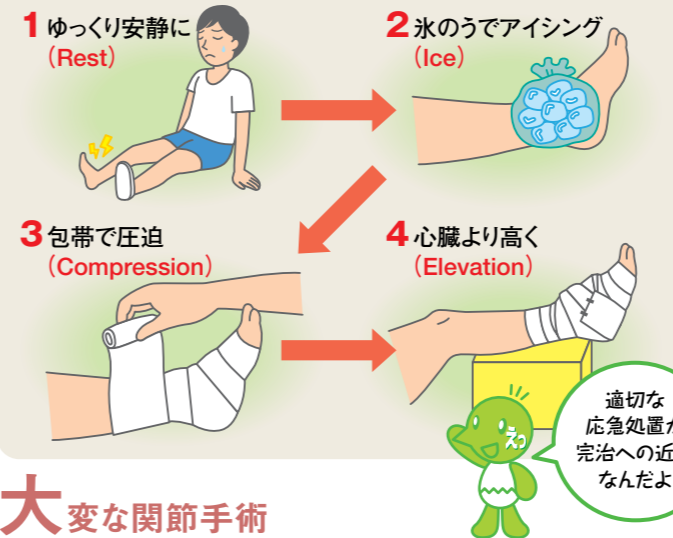
通常の整形外科との違い

一般の整形外科の診療が社会復帰をゴールとするのに対し、スポーツ整形外科はスポーツ復帰をゴールとし、さらに早期復帰を目指します。また、その選手の立たされている状況、例えば年齢やチーム内の立場、スポーツレベルなどで全く違う治療法を選択することもあります。さらに、治療のみではなく予防対策についても関わるため、時には整形外科以外のスポーツに関する医学的知識やスポーツ科学の分野の知識も求められます。

スポーツ外傷・障害の応急処置

RICE (ライス) 療法

出血・腫れを最小限に抑え、二次的な損傷・炎症を軽減。早期復帰に繋がる。



大変な関節手術

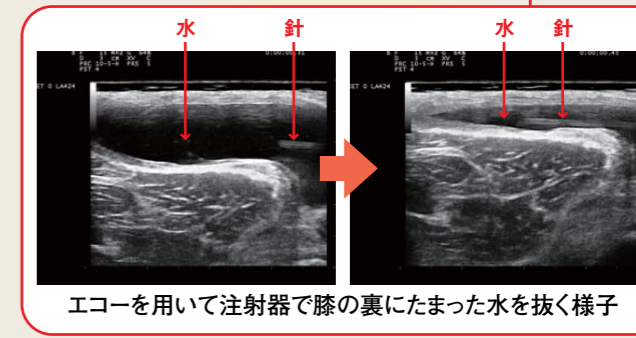
スポーツ障害において、膝にある半月板や前十字靭帯など、関節周辺の損傷というものは多く、当初これらの手術は内視鏡を用いず、皮膚を大きく切開して、関節の中を目で直接覗いて行っていました。しかしMRIを初めとする画像システムの普及や手術機器の進歩などによって、内視鏡は主に手術ツールとして用いられるようになり、様々な鏡視下手術が行えるようになりました。

これらのシステムの普及下でも靭帯再建手術となると高い技術が求められました。しかし、その経験から私は関節以外にも内視鏡手術を行える技術が身につきました。これらの手術はこれまでに多いときには年間で300件ほど、現在も約200件の執刀をこなしています。

超音波画像検査 (エコー)

超音波を対象物に当てて
その反響を映像化する画像検査法

筋、靭帯、腱、軟骨などの確認が容易に行える。スポーツ整形外科領域では、これらの疾患が多く、とても有用な画像検査。筋肉などが実際に動いている様子がその場で確認できる。



エコーを用いて注射器で膝の裏にたまった水を抜く様子

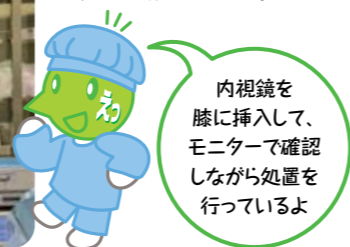
手術のいらない治療に向けて

関節手術に関しては、近年ナビゲーションシステムも開発され安定した技術が提供できるようになり、ほぼ行き着くところまで来た感があります。現場の選手や指導者の要望も踏まえると、これまで私は手術を中心にスポーツ整形外科を発展させてきましたが、今後は手術より超音波画像検査(エコー)を中心とした保存療法、早期復帰、応急処置、さらには予防対策といった分野に力を注ぐことを考えています。

将来的には、手術は必要とせず、診察室でエコーを用いた診断をし、その場の処置で患者さんを復帰させることが目標です。そのためにも今後も研鑽を続けたいと思います。



内視鏡視下での手術



内視鏡を膝に挿入して、モニターで確認しながら処置を行っているよ